



帯中「白亜祭」

帯中の三大大行事の一つである校内合唱コンクール「白亜祭」の招待を受け、先週10日(木)に参加しました。白亜祭は、今年で32回目を迎えました。この合唱コンクールの特徴的なところは、県立劇場で行われ、しかも、たてわり(3学年が合同で団を結成)合唱で発表するということです。例えば最初に出てきた合唱団は、3年2組・2年2組・1年8組と100人位の合唱団でした。今年の白亜祭のテーマ「翔(かける)～響け歌声、届け未来へ～」でしたが、異年齢集団が、全員で最高の歌声を作り上げようと、強い決意を抱いて一致団結する姿に感動しました。オープニングにあった全員合唱「ふるさと」は、千人規模の合唱となり、会場に歌声が響き渡りました。どの生徒も懸命な姿でした。中学生の指揮者は、堂々と楽しみながら指揮をし、伴奏する子供たちも、指揮者の一挙手に集中しながら演奏し、それを見ながら歌っている生徒たちからもまた、歌を楽しんでいる様子が伝わってきました。



次の日、朝から交通指導に立ち、帯中の生徒に「昨日は感動をありがとう!」と伝えると、「見に来てくれたんですか?ありがとうございます。」と答えてくれました。また私が「たてわりでの合唱は難しくない?」と1年生に尋ねると「いや、先輩たちがアドバイスをくれて、とても充実していました。」と答えてくれました。

白亜祭では、質の高い帯中の文化に触れることができ、6年生の子供たちを安心して送り出そうと思いつながりながら会場を後にしました。

●ひこうきぐも vol.32

中国の遼寧師範学校のゲストハウスでは、私は3日間ほどお世話になりました。そこは中国で泊まったどのホテルや施設より立派でしたが、ただ水洗便所だけが故障していて面倒でした。用を足したあとは、水のタンクに一回一回手を突っ込んで、水の詮を手動で抜かなければいけないのです。まあこれ位の不便さは、中国旅行の中では贅沢な悩みなのですが…。それはともかくとして、私は師範学校日本語学科に通う学生たちに講義をしなければいけないという使命があるのです。何を話そうか、日本語はどこまで通じるのだろうか、と講義の前日は頭を悩ませたのでした。少し緊張の面持ちで講義の日を迎えました。目の前には学生たちが興味津々といった感じで私の方を見えています。私の緊張とは裏腹に、自己紹介を終えると、学生から質問責めに合いました。「荒木老子(まだ若かったけど先生という意味らしい)、日本の流行を教えてください。」「荒木老子、日本人の初任給はいくらくらいですか?」「荒木老子、日本は中国人にとって住みやすいですか?」etc…。この師範学校の日本語学科の学生たちは、とても日本に憧れがあるようで、日本の文化や日本の経済水準の高さに興味があるようでした。チャンスがあれば日本で働くことを願っているのです。少し面食らいましたが、私も調子に乗っていつの間にか島倉千代子の「人生いろいろ」を歌っていました。しかも学生たちに手拍子をさせて…。学生たちとすっかり打ち解けると私の方からも質問をしました。太平洋戦争や天安門事件についての意見を求めたところ、あまりピンときていないのです。「これからの日中関係を我々若者が大切にしていましょう。」「天安門事件は北京で起こったものだ。」など自分とはあまり関係のないように捉えているのです。それよりもどうやって経済的に豊かになるのかが目先の関心事のようでした。このときは、GDPで日本が抜かれることになるとは夢にも思っていませんでした。これは、どの国の学生も同じ様なものなのかもしれませんが、日本の学生と少し違うところがあります。それは中国の学生たちは、モンゴル族や朝鮮族、漢民族など多数の民族から構成され、みなそれぞれ自分たちの民族に誇りをもっていることと、どの学生も一人っ子政策により兄弟姉妹がいないということです。



大学での講義の一場面
演題:これからの日中友好

※「ひこうきぐも」は、あくまでも荒木がバックパッカーとして旅をした当時、約30年前の街の様子です。現在とは状況に違いがあることをご了承ください。バックナンバーは一昨年度からの累積です。